

仕切ることが驚きだった」と頷きます。「ただ、社会に出たときに役立ついろんな経験を積む、良い機会になっています」と、やりがいも感じているそうです。学生指揮者も務める上田さん(クラリネット担当)は、「定期演奏会はその年のメンバーと演奏できる最後の舞台となります。演奏曲は難易度を高く設定し、開催が近くなると1日に5～6時間ほど、熱心に練習に打ち込みます。みんな演奏会を成功させたくて必至なんですよ。そして本番でうまく演奏できたときの達成感は格別!」と話してくれました。伝統の定期演奏会はメンバーにとって、バンドの一体感を高め、学生時代の大切な思い出を作るかけがえのない場となっているようです。



長野県北志賀高原での夏合宿。
4泊5日間、いつも以上に練習に
打ち込むことができる。



ブラスの最大のイベントとなる定期演奏会では、メンバー揃ってドレスアップをして出演。一般の方から友人など、毎年200人ほどの観客が訪れている。

入学式の演奏を聴いて感動！ 大学でも吹奏楽を続けることを決めた

ブラスは中学や高校の吹奏楽部の部活動と違い、賞の獲得を目指すコンクールに出場しないことで、和気あいあいとしたムードを作り出しているそうです。村石さんは「普段の練習から雰囲気ガピリガピリ、ギスギスすることなく、純粋に音楽を楽しめるんですね。コロナが明けて現在のメンバーは43名と充実し、演奏できる曲が増えてきたことも嬉しい。団員の多くは吹奏楽経験者ですが、高校までスポーツ部だった初心者も入団してくれました。初心者には経験者が優しく教えています」。小学、中学、高校と吹奏楽を続けてきた細川さんは、「ブラスでは初心者が頑張って、一緒に演奏できるようになることも嬉しい」といいます。

じつは経験者の中には、学業との兼ね合いから大学で吹奏楽部を続けるかどうか迷っていた人も多いそうです。上田さんもそのひとりでしたが、「入学式でブラスの演奏を聴いて、すごく上手で感動したんです。そこで、やっぱり続けたい!と心が決まりました」と語ります。荒井さんも同様に、「僕も入学式で先輩が演奏する学園歌『夢に翼を』を聴き、感動して吹奏楽を続けることを決めました。奏者としてまだまだ成長できると

思った」と話します。今回の取材で4人は「吹奏楽団で活動することで大学生活にメリハリが生まれ、授業にも打ち込める」と口を揃えて答えてくれました。彼らにとって吹奏楽団は、充実した学生生活を送るうえで欠かせないものなのでしょう。

最後に団長の村石さんは今後の抱負を次のように語ってくれました。「今も十分な団員数がありますが、メンバーは多ければ多いほどいい。多彩な個性が揃うことでバンドの音楽性が豊かになり、練習も活気が上がりますから。今後はSNSでの広報を強化して、勧誘を積極的に行いたい。そして伝統の演奏にますます磨きをかけたいと思っています」。皆さんも機会があれば、世田谷祭や横浜祭、定期演奏会にて、そんな吹奏楽団の演奏にぜひ耳を傾けてみてはいかがでしょうか。



2024年横浜祭での演奏シーン。
見事、実行委員会賞を獲得!

